

中年期における子どもの離家と エンプティ・ネストへの移行 —— 事例調査を通しての分析 ——

長津 美代子¹⁾・小柳 有希²⁾

1) 群馬大学教育学部家政教育講座

2) 長野県箕輪町立箕輪中学校

(2011年9月28日受理)

Home-leaving of The Children and Transition to Empty-Nest in Middle-Aged Stage

—— Data Analysis of Case Studies ——

Miyoko NAGATSU¹⁾, Yuki KOYANAGI²⁾

1) Department of Home Economics, Faculty of Education, Gunma University

2) Minowa Junior High School, Minowa Town, Nagano Prefecture

(Accepted on September 28th, 2011)

1. はじめに

日本では晩婚化が進み、未婚率は男性では25～29歳71.4%、30～34歳47.1%、女性ではそれぞれ59.0%と32.0%になっており、年々上昇している(平成17年国勢調査)。未婚の若者のうち親と同居している割合は25～29歳の男性では69.0%、30～34歳69.9%、女性ではそれぞれ81.8%と79.3%で、この割合も上昇している(平成17年出生動向基本調査)。これには、未婚の若者たちが成人しても家を離れることを強制されないため、親元に残る生活を送る道を選ぶようになってきたこと、また、親たちもそのような若者たちの選択を受け入れるようになってきたことが反映している。こうしたことが影響し、中年期の親たちのエンプティ・ネストへの移行が以前よりも難しくなってきた。

親たちが成人した未婚子と同居を続けることは、「子どものために」イデオロギーを子どもが成人したあとも続けることにつながっていくと指摘されて

いる〔宮本ほか 1999〕。

子育てを終了した夫婦は、「夫婦たること」の意味を見つめなおす時期にさしかかり、次のライフステージでの生きがいを求める「自分探し」を始めるようになる〔石川ほか 1993〕。また、子どもの自立への働きかけや次のライフステージへの移行意識なども、未婚成人子の離家とエンプティ・ネストへの移行に強くかかわっているのではないかと考える。

本章では、インタビュー調査から得られた情報をもとに、これまでの親子関係や自立を促す働きかけ、次のライフステージへの移行意識と子どもとの関わり方の変化、離家のきっかけや条件などについて整理する。そして、「原因説明図式」を用いて、中年期の親世代がエンプティ・ネストへと移行していくうえでこれらがどのように作用し、影響を及ぼしているのかについて説明する。さらに、エンプティ・ネストへの移行がもたらす効果についても検討する。

2. 分析枠組

1) 原因説明図式の活用

本章での分析枠組として、ラザースフェルドの「原因説明図式」を用いる。以下、この図式について説明する〔神原 1991〕。

原因説明図式では、4つの要因(押しの要因、引きの要因、引き金要因、通路付け要因)が相互に作用しあうことで、物事が生じる過程を説明することができるとしている。「押しの要因」とは、説明したい事から生じるように押し出す働きをもっている要因である。「引きの要因」とは、物事が生じるように引っ張る役目を持っているものである。「引き金要因」とは、物事を生じさせるきっかけとなった出来事に当たるものである。「通路付け要因」とは、説明しようとしている物事が生じることを可能にする条件のことである。この要因がどのような順序で働いて物事が生じるかについては、3通りの方法があるとされている(1→2→3、ア→イ→ウ、a→b→c)。以下に、原因説明図式の構造を図で示す。

2) 本章における要因の定義

本章では、既述の原因説明図式の考え方に沿って、エンpty・ネスト期への移行を説明するための4

つの要因を次のように定義する。

- ①「押しの要因」……自立した生活をする事ができるように子どもに対して働きかけていくことで、子どもが家を離れ、夫婦はエンpty・ネストへと押し出されていくことになる。したがって、「自立を促す働きかけ」を押し要因とした。
- ②「引きの要因」……子どもが離家したあとの夫婦だけの生活を考え、夫婦関係や親子関係のありかたを調整し、夫婦だけになる次のステージに対する準備をすすめていくことである。そうすることによって、新たなライフステージへと引っ張られていく。「子どもとのかかわりやこれからの生活意識」を引き要因とした。
- ③「引き金要因」……子どもが家を出ることになったきっかけをエンpty・ネストへの引き金要因とした。
- ④「通路付け要因」……エンpty・ネストへの移行を可能にする条件のことで、ここでは、「離家することができる条件」を考えた。離家のきっかけとなる条件を通路付け要因とした。

3. 調査対象者

インタビューの対象者は、前橋および高崎市在住

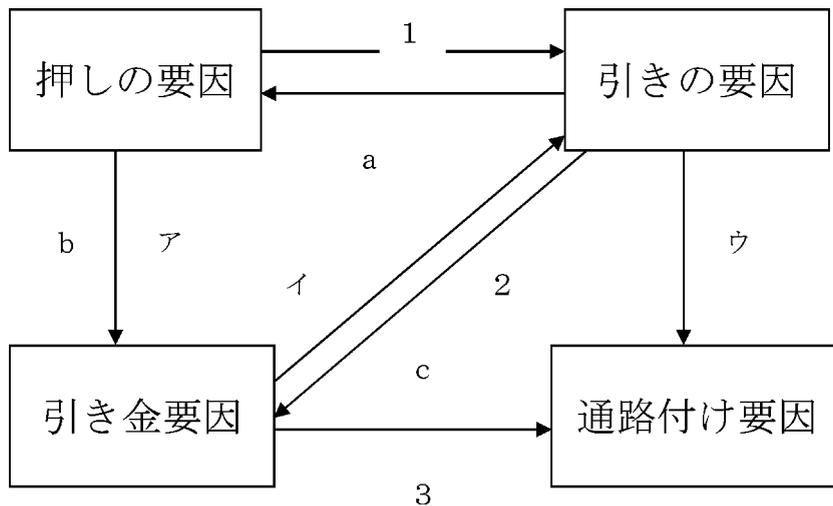


図1 ラザースフェルドの「原因説明図式」
神原文子 (1991) 『現代の結婚と夫婦関係』 培風館、50 頁より

の55～64歳にあたる男女20名である。調査は、2007年11月～2008年1月に実施した。調査時間は1時間半程度。エンプティ・ネスト群は12名（男性5名女性7名）で、平均年齢は62.5歳、非エンプティ・ネスト群は8名（男性4名女性4名）で、平均年齢は59.3歳であった。非エンプティ・ネスト群の平均年齢の方が低い。

4. 分析結果－語りの整理－

1) 自立を促す働きかけ

本調査の対象者が自立を促すために子どもたちに働きかけてきたことは次のようなことであった。

①エンプティ・ネスト群の場合

- ・人に迷惑をかけない…1ケース (A)
- ・いろいろなことをやってみる (外に出て経験させる) …3ケース (A・B・J)
- ・親の姿を見せる…4ケース (B・E・J・L)
- ・子どもの気持ちを尊重する…2ケース (C・I)
- ・余計な経済的な負担をかけさせない…1ケース (D)
- ・同居する上でわがままを許さない…1ケース (D)
- ・手に職をつけさせる…2ケース (E・G)
- ・しつけをきちんとする…1ケース (F)
- ・責任を持たせる…1ケース (F)
- ・目標を持って将来の進路を決めさせる…1ケース (H)
- ・自分の道を切り開けるように教育的支出を援助する…1ケース (I)
- ・生活するうえで基本的なことは自分でやらせてきた…1ケース (K)
- ・生活の知恵を教える…1ケース (L)

②非エンプティ・ネスト群の場合

- ・お金に関することをしつけてきた…2ケース (M・Q)
- ・働いている親の姿を見せる…1ケース (M)
- ・安定した就職をさせるために口を出す…1ケース (N)
- ・本人の自由にしている (親から無理強いはしな

表1 対象者の特徴

(エンプティ・ネスト群)

対象者	年齢	子どもの状況	備考
A	65	40歳女・別・仕事有・既婚 34歳男・別・仕事有・既婚	
B	64	32歳女・別・仕事無・既婚 30歳女・別・仕事有・既婚	
◎	67	34歳女・別・仕事無・既婚 29歳男・別・仕事有・既婚 26歳男・別・仕事無・未婚	次男は留学中
D	64	41歳女・別・仕事有・未婚 33歳男・別・仕事有・既婚	
E	63	34歳女・別・仕事有・既婚 31歳女・別・仕事有・既婚	
Ⓔ	66	38歳男・別・仕事有・既婚 35歳男・別・仕事有・既婚	長男とは同一敷地内別棟
Ⓒ	62	32歳女・別・仕事有・既婚 30歳女・別・仕事有・既婚 28歳女・別・仕事有・既婚	
Ⓗ	58	33歳男・別・仕事有・既婚 30歳女・別・仕事有・未婚	
①	60	32歳男・別・仕事有・未婚 31歳男・別・仕事有・既婚 29歳男・別・仕事有・未婚 27歳男・別・仕事有・既婚	
J	60	37歳女・別・仕事有・既婚 35歳男・別・仕事有・既婚 30歳男・別・仕事有・未婚	
K	65	33歳女・別・仕事有・既婚 27歳男・別・仕事有・既婚	
L	56	31歳男・別・仕事有・既婚 29歳女・別・仕事有・未婚	いずれ長男と同居予定

(非エンプティ・ネスト群)

対象者	年齢	子どもの状況	備考
M	60	32歳女・同・仕事有・未婚	
N	58	34歳女・別・仕事有・既婚 31歳男・同・仕事有・未婚	
O	56	25歳女・同・仕事有・未婚 22歳男・同・仕事有・未婚	小5から中2まで長男不登校
P	59	31歳女・別・仕事有・既婚 28歳女・同・仕事有・未婚 22歳男・同・仕事無・未婚	長男はニート
Ⓖ	56	26歳女・別・仕事有・既婚 21歳女・別・仕事有・未婚 17歳女・同・仕事有・未婚	次女はアルバイト・三女は高校生
Ⓓ	62	34歳女・別・仕事有・既婚 29歳男・同・仕事有・未婚	長男は派遣
Ⓔ	63	33歳男・別・仕事有・既婚 31歳男・同・仕事有・未婚 22歳男・別・仕事無・未婚	三男は大学生
Ⓗ	61	33歳女・同・仕事有・未婚 30歳男・別・仕事有・未婚	

注) エンプティ・ネスト群、非エンプティ・ネスト群ともに、○印は対象者が男性であることを表す。

い) …4 ケース (O・P・R・S)

- ・子どもとの時間を大切に生きて…1 ケース (T)
 - ・時々声かけをする…2 ケース (R・S)
 - ・特にしてこなかった…1 ケース (O)
- ①および②から以下のことが言える。
- ・エンプティ・ネスト群、非エンプティ・ネスト群のそれぞれのケースを比較してみると、自立を促す働きかけとして親の姿をみせるというケースはエンプティ・ネスト群に多い。また、子どもがやりたいことを尊重したり、いろいろな経験をさせたりすることが必要であると考えているケースも比較的多い。エンプティ・ネスト群の親たちは意識的に子どもに対して働きかけていることがうかがえる。
 - ・エンプティ・ネスト群にあって非エンプティ・ネスト群のケースにみられなかったのは、手に職をつけさせるということである。親たちは手に職をつけることがこれからの時代に必要と感じており、子どもたちは看護師、美容師などといった職業に就いている。エンプティ・ネスト群で手に職をつけることが必要であると感じているケースの場合、子どもは資格の取れる学校に進学し、そのまま正規雇用で就職している。それに対して、非エンプティ・ネスト群の場合、フリーターや派遣といった就業形態が目立つ。このことは、経済的に離家して暮らす余裕が無い状態であるということでもある。将来どのような職業に就くのかを考えさせ、手に職をつける方向で進路を決めさせるという働きかけが、安定した就職につながり、離家して生活できる経済力を持たせることになっている。

2) 親子関係経歴と子どもの捉え方の変化

ここでは、どのような親子関係を形成してきたのか、そして現在はどのように子どもを捉えているのかを述べる。

①エンプティ・ネスト群の場合

- ・会話をする時間（一緒に行動する時間）をたくさん設けてきたと考えているケースが多い (B・

C・F・G・H・I)。これらのケースの場合は、将来のことを一緒に考える時間を持ったり、忙しい仕事の中で少しでも子どもと接する時間をとろうとするなど、意識的に働きかけていた。そうした働きかけを通して、子どもの成長過程を見てきた親は、子どもが自立したと認識すると、子どものことを一人の大人や、人間的に同じレベルという見方で捉えるようになっていく。

- ・子ども中心の生活はしてこなかったという語りがあった (D・J)。子どもを生活の中心において子育て期を過ごしたり、子どもを甘やかしたりするということをしていない。このことは、子どもが離家したとしても、それまでの生活に大きな変化をもたらすことがないことから、エンプティ・ネストへの移行を容易にする。また、これらのケースの場合、子どもが離家したあとの親子関係がとても良好で、満足しているというプラスの評価をしている。
- ・同居している時（高校生～自立して離家まで）、子どもに対して口出ししたり、子どものわがままを聞き入れなかったりすることによって、子どもが反発し、一時的に子どもとの関係が悪化したケースもある。DとEの場合、些細なことで喧嘩をしたり、子どもに対して不満を持ったといったことがあったという。しかし、就職や結婚などで子どもが離家し、親の家庭とは別の生活を営み始めるようになると、関係に変化が生じ、子どもとの関係が再構築されている。子どもとたまに会ったり連絡を取ったりするといった関係に変化し、以前よりも付き合いやすくなったという評価をし、親子関係に満足している。子どもが家にいるときは子どもの行動が目についてしまい、それについて注意をするといったことが多く、子どもも、成長するにつれて口を出されたくないという思いを持つようになる。親子間で衝突が起ってしまい、親も子どももお互いが関係に不満を持っているが、いったん離家することで、子どもの生活に必要な以上に入り込まないという意識になり、子どもと親が干渉しあわない関係になっている。子どもの

離家は、子どもと親の双方が満足しあえる親子関係を形成するためのひとつのきっかけになっている。

②非エンプティ・ネスト群の場合

- ・今回のケースでは、同性の親子関係が悪いという場合が比較的多く見られた（M・O・P・R・T）。Mの場合、娘が離家していたときはお互いの関係が良好であると感じていたが、子どもが同居を始めたときから、子どもの生活が気になり、それに対して口出しをするようになり、子どもが反発したり、母親の批判をするようになったりしている。このケースから、別居している方が、子どもの生活が見えないため、親も口を挟まないと割り切れているので、親子関係が良好に保たれていると言える。
- ・ケースO・P・R・Tの場合はいずれも、父親と息子の関係、母親と娘の関係が良好でなかった経歴を持っている。子どもが離家している場合はこのような特徴は見られなかった。
- ・子どもが働いている場合、金銭的な負担がかからなくなってくると、大人になってきたという評価はしているが、実際の親子関係や生活の様子をみると、子どもに対して何かしてあげる、行動が気になる、世話をしなくてはならない対象として接している。

3) ライフステージへの移行意識と子どもとのかわり方

これからの生活意識と子どもとのかわりについて、対象者たちの語りをそれぞれについて記述する。

①エンプティ・ネスト群のこれからの生活について

- ・全体として、「読書をする」「ボランティアをする」など今までやってきたことや、やりたくてもできなかったことなどを中心に、自分の好きなように生活していきたいという思いが強い。また、新しいことを見つけて積極的に挑戦していこうとする意識が強い。
- ・男性ケース（H）の場合、仕事中心の生活はしないという意識を持っている。仕事を辞めた後ど

のような生活をしていくかということを見据えて、自分に合う趣味を見つけており、それを中心とした生活を送りたいと考えている。このケースの場合、子育てが終了したあとのライフステージを見据えて今までの生活を送ってきている。

- ・ケースKの場合、仕事を退職し、夫は定年後まだ仕事をしている状態であるが、いずれ仕事から引退するときのことを考えて、次は何をして生きていくのかについて今から考えていくように、夫を促している。夫の方も何をしたいか模索する姿勢が見られる。
- ・ケースA・Dでは健康でありたいという思いが語りの中で出てきた。これは、子どもに対して負担や迷惑をかけたくないという理由からだけではなく、自分が好きなことを自由にたくさんしたいという願いも含まれている。そのために健康でいたいという意識を高めている。
- ・対象者たちは、好きなことを気ままにやれるライフステージに大きく期待している。子どもが離家し、子どものことに携わらなくてもよくなったという解放感を感じている。子どもの離家は、次のライフステージでどのように生活を楽しむかを考えるひとつのきっかけになっている。子どもがいなくなった後の生活でやりたいことがたくさんあるケースDは、子どもに家を出て行くように積極的に働きかけたということである。

②エンプティ・ネスト群の子どもとの関わりについて

- ・ケースA・B・D・F・H・J・Kは、これからの生活の中で、孫の世話をする気持ちは持っていない。自分のこれからの生活が、子どもたちの生活の中に組み込まれることに抵抗を示している。孫を見ているより、自分がやりたいことができる時間を大切にしたいと考えている。また、これらの対象者たちは、子どもの生活と自分の生活は別のものであるという意識を持っており、子どもが離家していることで、子どもとの関わりは必要以上にしないと考えている。

- ・ケース B・F・I・J・K の場合、子どもたちがどうしても困って助けて欲しいとやってきたときは助けるが、親たちが進んで何かをしてあげるという関わり方はしないとしている。ケース F の場合は、自分たちの子育てに親が関わりすぎて衝突がいくつもあったため自分たちは必要以上に関わりたくないと考えている。他のケースの場合は、子どもが離家し、自立した生活を送っている時点で別の家族という意識を持ち、それに対して必要以上に働きかけることはしないが、どうしても子どもたちの中で解決しきれず、助けを求めてきた場合は助けるが、基本的には干渉しないという関わり方をしている。
 - ・ケース K の場合、義理の親と同居をしていたが、息子の嫁が同居するという考えを持っていても、できれば台所は別にしたりして、友達が遊びに来てても気を使わなくていいようにしたいと考えている。子ども家族は子ども家族の生活、自分は自分の生活と分けて考えていこうとしている。別々に暮らしてきた過程で形成してきた自分の生活を子ども家族から干渉されたくないと考えている。
- ③非エンプティ・ネスト群のこれからの生活について
- ・ケース S の場合、現在の生活は自営業の仕事が中心であり、それをできるだけ現役で続けたいとしている。会社に勤めている人のように一定の年齢で退職ということがない職種なので、仕事をしていくことがこれからも続き、生きがいのように感じている。
 - ・ケース M・N・O・P・Q・R・T では、自分がやりたいことを中心とした生活を送っていかうと考えている。特にケース R の場合は、自分のライフコースを4段階に分け、自分がいる位置を考えながら、そのステージでこなすべき目標を立てている。このように非エンプティ・ネスト群の場合でも、自分がやりたいことを中心とした生活を送ろうと考えている。それは、信仰であったり趣味の満喫であったりである。
- ④非エンプティ・ネストの子どもとの関わりについて
- ・ケース P の場合は、子どもがニートであるが、それに対してどのように働きかけてよいかかわからず、本人任せという現状になっている。そのため、小遣いを渡したり、家事をしてあげたりと、子どもの面倒を見るということが生活の中に残っている。また、ケース M の場合も同様に、生活の中心は自分に移っていると自覚はしているが、夕食を作っておいてあげるといった子どもへのかかわりは残っているため、子どもの面倒を見なくてもいい生活とは言い切れない部分がある。
 - ・ケース Q・S の場合、理想として子どもに老後の面倒を見てほしいという思いがある。エンプティ・ネスト群のケースでは、子どもに老後のことを頼むといった語りは聞かれなかった。しかし、非エンプティ・ネスト群の場合は、老後に子どものかかわりを強く求めている。子どもが離家してしまった場合は、仕方がないものだと言ったり(ケース G)、最初から頼りにしていない(ケース D)といった考えを持っているが、子どもと同居していることで、子ども依存の意識は根強く存在している。
 - ・ケース N の場合、結婚した娘との関わりは継続していきたいと願っている。この対象者は、家族以外のネットワークが希薄で、娘と一緒にいる時間が一番いいと感じている。また、ケース S の場合も、子どもが離家して関わりが減っていくことに対して、子どもと同居して何世代かで住むといった家族関係の方がいいと感じている。非エンプティ・ネスト群の場合、子どもの生活と自分の生活を切り離したものとして考える傾向がエンプティ・ネスト群ほど強くはなく、子どもとの関わりの変化を意識的に追求する傾向が弱い。
 - ・ケース O の場合、子どもたちが結婚した後もできるだけ顔を出して欲しいと考えている。このケースの場合、夫婦の関係よりも、子どもとの関係の方が強い。夫婦での生活は一緒にいるだ

けといった関係であり、子どもとの関係を保っていきたくと考えている。

4) 親役割の終了と子どもの離家

①エンプティ・ネスト群の場合

親役割終了の認識時期・離家のきっかけ・現在、親役割が終了しているかを対応させると、表2のようになる。ここから次のことが言える。

- ・親役割終了の認識と子どもの離家のきっかけとが対応しているケースは6ケース (A・B・D・F・G・I) である。
- ・子どもが大学進学のために離家したケースの親たちは、仕送りをしているためか、大学入学を親役割の終了と認識していない場合が多い。

・親役割の終了は、結婚によって家を出て別の家族を形成することや、就職して自立して生活することができるようになったときに感じることが多い。

・大学に進学したケースの中で、1ケース (D) 以外は、実家に帰らず就職・結婚をしている。親がエンプティ・ネストになるひとつの要因として、子どもが進学等で離家した場合、そのまま就職・結婚といったライフコースを歩んでいくことがあげられる。

②非エンプティ・ネスト群の場合

親役割終了の認識時期・離家のきっかけ・現在、親役割が終了しているかを対応させると、次のことがいえる (表2)。

表2 親役割の終了と離家のきっかけ

(エンプティ・ネスト群)

対象者	親役割終了の認識時期	離家のきっかけ	現在、親役割は終了しているか
A	結婚	①結婚 ②結婚	①している ②している
B	大学入学	①大学進学 ②大学進学	①している ②している
C	終了なし	①結婚 ②結婚 ③留学	①していない ②していない ③していない
D	結婚・就職	①就職 ②高校進学	①している ②している
E	就職	①結婚 ②大学進学	①している ②している
F	結婚	①単身赴任 ②結婚	①している ②している
G	就学の援助が終わったとき(就職)	①結婚 ②就職 ③結婚	①している ②している ③している
H	結婚	①大学進学 ②大学進学	①している ②していない
I	就職	①就職 ②結婚 ③大学進学 ④大学進学	①している ②している ③している ④している
J	終了なし	①結婚 ②就職後 ③大学進学	①していない ②していない ③していない
K	無意識のうちに終了	①大学進学 ②大学進学	①している ②している
L	終了なし	①大学進学 ②大学進学	①している ②していない

(非エンプティ・ネスト群)

対象者	親役割終了の認識時期	離家のきっかけ	現在、親役割は終了しているか
M	大学入学	大学進学	している
N	結婚	①大学進学 ②大学進学	①している ②していない
O	結婚	①離家したことがない ②離家したことがない	①していない ②していない
P	終了なし	①大学進学 ②大学進学 ③離家したことがない	①していない ②していない ③していない
Q	税金を払う(就職する)	①大学進学 ②就職 ③離家したことがない	①している ②していない ③していない
R	大学卒業(就学の援助の終了)	①結婚 ②大学進学	①している ②している
S	大学入学結婚	①跡を継ぐ ②離家したことがない ③大学進学	①している ②していない ③している
T	終了なし	①大学進学 ②就職	①していない ②していない

注) ・エンプティ・ネスト群、非エンプティ・ネスト群ともに、○印は対象者が男性であることを表す。

・太字は、親役割終了の認識時期と離家のきっかけが対応していることを示す。

- ・離家したことがないケースの場合、親役割が終了したと感じているケースはない。
- ・非エンpty・ネスト群の場合、エンpty・ネスト群のケースと比べると、親役割が現在も続いていると感じている者が多い。
- ・親役割の終了意識が離家のきっかけと対応しているケースは3ケース (M・Q・S) である。非エンpty・ネスト群の場合、子どもが離家することが親役割の終了につながるとは必ずしもいえないようである。

5) エンpty・ネスト移行による効果

エンpty・ネストの夫婦に対して、「子どもが離家したことによってどのような変化があったか」と質問したところ、多くの人が、子どものことを気にしなくてすむようになり、子どもとの関係が以前よりもよくなったと感じている者が多かった。

また、一時的にエンpty・ネストを経験したことのある非エンpty・ネスト群の対象者 (M) も、子どもが家にいなかったころの方がお互い満足する親子関係であったと語っており、同居している現在の親子関係に不満を持っていることがわかった。

このことから、エンpty・ネストへの移行は、親も子もお互いに満足できる親子関係を形成する効果があるといえよう。

5. 分析結果—原因説明図式からみたエンpty・ネストへの移行過程—

これまで、エンpty・ネスト群と、非エンpty・ネスト群の対象者の語りをいくつかの観点から整理・記述してきた。ここでは、それらの記述を原因説明図式に当てはめてエンpty・ネストへの移行がどのようになされているのかを考えていく。また、非エンpty・ネスト群の対象者たちの語りから、エンpty・ネストへの移行を妨げていると考えられることがらについても検討する。

1) 原因説明図式からみたエンpty・ネストへの移行

まず、押しの要因である「自立を促す教育」は、

既述の「自立を促す働きかけ」の部分から転用したものである。引きの要因は、子育て終了後、子どもに対して独立した大人として関わり、自分らしく生きる次のステージへと歩みを進めていこうとする意識や行動である。すなわち、「子どもとの関わりやこれからの生活意識」で、これらは、既述の「親子関係経歴と子どもの捉え方の変化」「次のライフステージへの移行意識と子どもとの関わり方」「親役割の終了と子どもの離家」の部分をもとめたものである。引き金要因である離家のきっかけは、大学進学、就職、結婚、就職後独り立ちしたいという子どもの自発的な希望、などに整理される。通路付け要因にあたる「離家することができる諸条件が整う」については、仕送りや住まいが準備され一人暮らしができる環境が整う(進学)、就職してひとりで生活できる条件が整う、新しい家族を形成する、などがあげられる。

図2を見ながら、1→2→3の順にエンpty・ネストへと移行していく過程について説明する。親の方から、子どもにいずれ自立をして家を出るように働きかける(自立を促す働きかけ)。一方、親の方も、夫婦だけになる生活を予想し準備を始める(夫婦だけの生活になることに引っぱる)。やがて、子どもが進学や就職などのきっかけによって離家することになり、それにともなった条件が整うことで、エンpty・ネストへの移行が実現することになる。今回の調査では、E・K・Lのケースが該当する。

次に、a→b→cの順にエンpty・ネストへと移行していった過程について説明する。親は、「子は子、親は親」というライフステージを予測している。子どもに対して、自立し親元を離れることができるように働きかけていく。子どもは離家のきっかけとそれに伴う条件を得てエンpty・ネストへの移行が実現していくことになった。B・D・H・Jのケースがこれに該当する。

次に、ア→イ→ウの順にエンpty・ネストへと移行していく過程について説明する。自立を促す働きかけを子育ての中で子どもに対して行ってきた。一方、子どもは離家するきっかけを得た。親は子どもがいけない生活について考え始めるようになってい

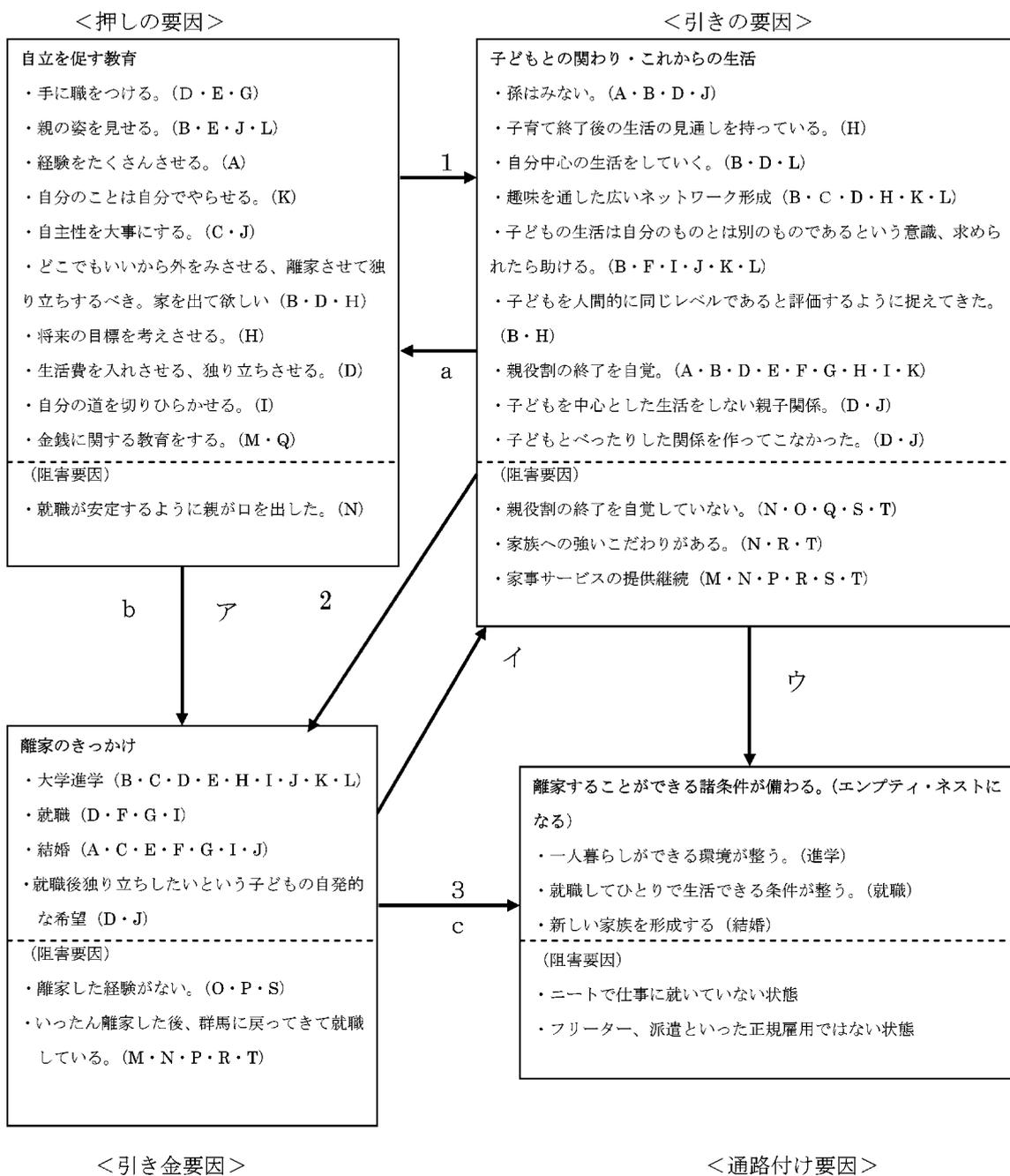


図2 原因説明図式にあてはめたエンプティ・ネストへの移行

く。そして、子どもが離家するための諸条件が整えられて家を離れていき、エンプティ・ネストへと移行していった。C・I・F・G・Aのケースがこれに該当する。

このように、原因説明図式に当てはめることによって、エンプティ・ネストへの移行過程を説明することができる。

2) エンプティ・ネストへの移行にいたらない理由について

一方、エンプティ・ネストへの移行にいたらない原因について考える(図2)。自立を促す働きかけにおいて、エンプティ・ネストへの移行を妨げていると考えられるのは、対象者Nのケースである。

「就職なんですけど、男の子が、何ていうんだらう、きちんと就職したところが遅刻が多かったり、最初はちょっといいかげんだったんですよ。それで、いや、何ていうんだらう、正社員だったのが正社員じゃなくなっちゃったわけですよ。それなのに、そこにいて下働きじゃないけどそういう仕事をしたんで、私は、そんなんじゃないかとだってきちんとした生活できないからって私の方から無理やりやめさせて、違うところに勤めさせたんですけど、そこも正社員じゃなかったのね。だから、そこもごめん、やめさせて、ほんできちんとしたところへ就職させて、今は正社員で頑張ってますけど、それまではちょっと親が子に言いましたね。親が口出ししちゃいました。」

この場合、対象者は、子どもの就職に対して口出しをし、子どもが自発的に就職を安定させようとする行動を親が妨げている。親の支配下におかれた子どもは、なかなか飛び立つことができない。親の過干渉は、子どもが自立し親をエンプティ・ネストへ押し出す阻害要因となっている。

子どもとの関わりやこれからの生活意識における以下の事からもエンプティ・ネストへの移行を妨げている要因である。

- ・親役割の終了を自覚していない(N・O・Q・S・T)。
- ・親子関係の悪さから終了意識が確立できていない(M・O・P・R・T)。
- ・家族以外のつながりよりも、家族への強いこだわりがある(N・R・T)。
- ・未婚同居子への家事サービス提供が継続されている(M・N・P・R・S・T)。

非エンプティ・ネスト群の対象者たちは、食事や洗濯を中心とした家事サービスの提供を継続し、親役割の終了意識が低い。また、子どもや親族といった、家族とのつながりを外部とのつながり以上に重視している傾向がある。これらのことが、エンプ

ティ・ネストという夫婦だけの生活に引き込まないように働いている。

離家のきっかけがなかったり(O・P・S)、いったん離家したが、就職のため群馬にUターンし親元にいることが続けば(M・N・P・R・T)、親はエンプティ・ネストには移行できない。また、ニートで仕事に就いていない状態、フリーターや派遣などで正規雇用の就職ではない状態では、親元から離れて自立した生活をすることは困難である。これらは、親をエンプティ・ネストへと通路付ける阻害要因となっている。

6. 結論

エンプティ・ネストへの移行が可能になるためには、子どもは離家して自立した生活を営むべきであるという意識をもち、そのためのさまざまな働きかけを行うことが大切である。また、子どものためにしてあげる生活から自分を中心とした生活に切り替え、次のライフステージ移行への意識を持ち、その準備をすることも重要である。さらに、子どもが離家するきっかけと条件が整えられるよう親はそれを支援する。こうしたことが作用して、エンプティ・ネストへと移行していく。エンプティ・ネスト移行後は、親子関係が良くなったと実感しているケースが多い。

一方、非エンプティ・ネスト群は、エンプティ・ネスト群に比べて親の年齢が比較的若いため、子どもの結婚や安定した就業というきっかけがあれば、エンプティ・ネストへ移行していくのではないかとすることも考えられる。しかし、子どもはいつかは自立していくであろうと、子ども任せにしていたり、成人した子どもの世話(食事・洗濯などの家事)をしてあげることに特に抵抗を感じていなかったりなど、「押しの要因」と「引きの要因」がともに弱いということもできる。また、子どもが正規雇用や自営業など親から自立して生活できる職を得ることができなければ、エンプティ・ネストへの移行は難しい。

昨今の非正規雇用の若者の増加は、子どもが自立・離家していく阻害要因になっているとともに、

親が次のライフステージへと人生を進めていくための阻害要因ともなっている。

本研究の調査は、平成 18～20 年度科学研究費補助金（基盤研究 C、課題番号 18500591「中年後期における夫婦関係とパーソナル・ネットワークに関する研究」、研究代表者 長津美代子）により実施したものである。

文献

- 神原文子（1991）『現代の結婚と夫婦関係』培風館
 国立社会保障・人口問題研究所（2005）『平成 17 年 出生動向基本調査』
 石川 実・大村英昭・塩原 勉 編著（1993）『ターミナル家族』NTT 出版
 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘（1999）『未婚化社会の親子関係 お金と愛情にみる家族のゆくえ』ミネルヴァ書房
 総務省統計局（2005）『平成 17 年 国勢調査』